

第3章 基本文法

この章で解説されている基本的文法知識は、英語の総合力を高めて行く際に、その基礎となるものです。一度全体を読んで、未習得の項目をチェックし、第1 Semesterが終了するまでに再確認の作業をしておくことを希望します。また、このような基本的文法知識は、TOEICなどの試験で問題として出題されることが少なくないので、アカデミック英語や基礎英語の予習復習でも、文法事典としてこまめに参照して下さい。解説中の「付加情報」の項目は、大学英語の範囲を超えるものかもしれませんが、有益な情報であるので覚えておくといいでしょう。

「基本文法」では、文法項目が列挙されているので、どの項目から参照しても構いませんが、最初に必ず「1 「基本文法」の説明方法と用語」を熟読して下さい。

最初に必ず「1 「基本文法」の説明方法と用語」を熟読すること

なお、具体例の前に置かれているアスタリスク (*) は、その例が容認されない例であることを示します。

1 「基本文法」の説明方法と用語

「基本文法」では、中学校・高等学校などで採用されているものと異なった文法の説明方法や用語を採用している。その違いについて以下で解説するので、これらを十分に理解した上で「基本文法」を読むことが必要である。

A 5文型による説明ではなく、述語の意味を中心にした説明

以下の例を考えよう。

Olive likes traveling alone.

O

Olive likes her son traveling alone.

O

C

表記したように、5文型の説明に従えば、前者はSVO文型と、後者はSVOC文型と分類される。この説明は、後者のher sonと traveling aloneが主語述語関係にあることを学習者が理解しているか、などを確認するためには有益である。しかしながら、上の例の用法を習得するには、述語likeの意味に着目するほうが効率的である。この述語の意味「好む」を考えれば、この意味を完結するためには「好む側」「好まれるもの・事柄」が必要となることが自ずと理解できる。

<u>Olive</u>	likes	<u>traveling alone.</u>
好む側		好まれる事柄
<u>Olive</u>	likes	<u>her son traveling alone.</u>
好む側		好まれる事柄

このような観点から見ると、この二つの構文は意味的には同一であることになり、文型を区別する理由がなくなる。特に、動詞の後の部分を、o・ocと区別することはできないことになる。もちろん「好まれる事柄」を表す表現に違いがあるのは確かである。

traveling alone
her son traveling alone

前者が「(自分が) 一人で旅行すること」を、後者が「息子が一人で旅行すること」を、それぞれ表すことを知らなければ、これら二構文を理解することはできない。しかしながら、このこと（動詞+ing表現の主語の現れ方）は、これらの構文に特有のことではなく、動詞+ing表現一般に観察されることである。

さらに、次の例を考えよう。

Animals inhabit the forest.
Animals live in the forest.

5文型の説明を採用すれば、前者はSVO文型と、後者はSV文型と分類される。しかしながら、このような分類は、英語学習の役に立つとはもはや言えない。これらの二つの文は基本的に同じ事柄を表現しているからである。

<u>Animals</u>	inhabit	<u>the forest.</u>
住む側		住む場所
<u>Animals</u>	live	<u>in the forest.</u>
住む側		住む場所

likeを述語とする構文で「好まれる事柄」を表す表現に違いがあったのと同じように、上記の構文の「住む場所」を表しているのは名詞表現と前置詞表現であり、形が異なっている。しかしながら、名詞表現であろうと前置詞表現であろうと、「場所」を表すことが可能であり、上記の二構文を習得するためには、その述語が「住んでいる」という意味を表すこと、またinhabitの後には名詞が現れ、liveの後には名詞が現れないこと、この二点を知っていれば良く、5文型の説明を持ち出すまでもない。

最後に、次の例を考えよう。

We treated her courteously.
*We treated her.

動詞treatを含む上の例では、副詞表現が欠けると不適格になる。このことは、述語の意味に着目して考えれば、容易に納得できるだろう。「処遇する」という意味を考えると、「処遇する側」「処遇される側」「処遇方法」の三つの要素が必要なのが見える。

<u>We</u>	treated	<u>her</u>	<u>courteously.</u>
処遇する側		処遇される側	処遇方法

日本語で考えてみても分かるが、「我々は彼女を処遇した」という表現では、「処遇」の意味が完結しない。「丁寧に」などのような「処遇方法」が必ず必要になる。そのために、treatを含む上の例では、副詞表現が欠けると不適格になると理解できる。このことは、5文型に基づく説明では処理できない問題である。5文型の説明では、副詞表現は無くても良い要素として扱われているからである。

B 述語連結要素

上記の解説の中で、「好む側」「好まれる事柄」「住む側」「住む場所」「処遇する側」「処遇される側」「処遇方法」などの言い方をした。これらが指し示す表現は、述語の意味を完結させて文・節を組み立てるために必要な要素である。換言すれば、述語と意味的に密接な関係を担い、述語と意味的に連結する要素であると言える。そこで、これらを、述語連結要素と呼ぶことにする。

述語連結要素： 述語の意味を完結させて文・節を組み立てるために必要な要素
述語と意味的に密接な関係を担い述語と意味的に連結する要素

下記の例の下線部分が、それぞれの述語の述語連結要素となる。

<u>Olive</u>	likes	<u>traveling alone.</u>
<u>Olive</u>	likes	<u>her son traveling alone</u>
<u>Animals</u>	inhabit	<u>the forest.</u>
<u>Animals</u>	live	<u>in the forest.</u>
<u>We</u>	treated	<u>her</u> <u>courteously.</u>

C 動詞+ing、to+動詞

下記の例を再度考えよう。

Olive likes	traveling	alone.	
	O		
Olive likes	her son	traveling	alone.
	O	C	

前の解説では、「動詞+ing」という言い方をして、動名詞・現在分詞という用語を使っていない。5文型による説明を採用すれば、目的語（O）の機能を付与されるtravelingは動名詞と、また補語（C）の機能を付与されるtravelingは現在分詞と、分析される。

しかしながら、述語と述語連結要素に着目する説明では、この二つのtravelingを区別することはできない。

traveling alone	「(自分が) 一人で旅行すること」
her son traveling alone	「息子が一人で旅行すること」

traveling自体は、いずれの場合でも全く同じ役割を果たしているのであるから、それに複数の名称を付けることは不必要である。したがって、「基本文法」では、動名詞と現在分詞を区別せず、動詞+ingという統一用語を用いる。

動詞+ing：動名詞と現在分詞の総称（「動名詞、現在分詞」の用語を用いない）

また、動詞+ingという言い方に対応させて、不定詞をto+動詞と呼ぶことにする。

to+動詞：toを伴う不定詞のこと（「不定詞」の用語を用いない）

D 「目的語」の不使用

最後に、「目的語」という用語も、「基本文法」では用いないことにする。ある表現が目的語であるという場合、(1)その表現が目的格を担っている、(2)その表現が目的語の位置を占めている、(3)その表現が目的語として意味的に機能している、などの様々な状況のうちどれを指し示すのかが曖昧である場合が少なくなく、不要な混乱を引き起こしかねない。例えば、下記の例をもう一度考えよう。

Olive likes	traveling	alone.	
	O		
Olive likes	her son	traveling	alone.
	O	C	

すでに解説したように、「述語と述語連結要素」からこれらの構文を考える際、traveling aloneもher son traveling aloneも「好まれる事柄」を表す、つまり意味的にはlikesの目的語であると言える。つまり、「目的語」という考え方は、採用する文法の説明方式によって、全く異なった形で使われるわけである。「基本文法」では、述語連結要素という考え方を用いるので、「目的語」の用語は不要であり、混乱を引き起こしかねない「目的語」の用語を敢えて用いる理由もない。そこで「基本文法」では、この用語を用いないことにする。

「目的語」の用語は用いない

2 動詞

動詞は、「状態、出来事、行為」などの意味を表し、節内で述語として機能する。

A 現在形と過去形

現在形の動詞は、現在の習慣、習性、真理、確定的な未来の事柄を表す。過去の習慣を表す場合には、過去形動詞に頻度を表す副詞を添えたり、would、used toを動詞の前に置いたりする。

Professor White teaches mathematics.
 The sun sets in the west.
 Timothy leaves here for Tokyo tomorrow.
 Lilly often listened to the radio at midnight.
 Olive would often read her daughter to sleep.

解説

注意 時・条件を表す副詞節では、未来の事柄でも、現在形で表す。

If Henry makes a mistake, he will never fail to conceal it.

比較 I don't know if Henry will make a mistake.

付加情報 ただし、意志や依頼を意味するwillは、この限りではない。

If you will lend me some money, I can get a grandstand seat.

付加情報 過去の習慣を表す場合、would は、動作を表す動詞と頻度を表す副詞を伴って「過去の回顧」を表すのに対し、used toは、動作や状態を表す動詞を伴い「現在との対比」を表す。

He isn't so handsome as he used to be.

B 進行形 (be + 動詞+ing)

現在進行形は、一般に行為・出来事を表す動詞で用いられ、限られた期間内の進行動作や、反復動作、近い未来の事柄を表す。

Peter is watching TV now.
 Wayne is always complaining.
Is Roberta coming today?

解 説

注意 日常的習慣を表すために進行形を用いてはいけない。

Professor White teaches mathematics.

(ホワイト教授は数学を(ずっと)教えています)

Professor White is teaching mathematics.

(ホワイト教授は数学を教えているところです)

付加情報 find、die、become、getなどのように、事柄の結果状態を重点的に描写する動詞を進行形にすると、「その結果に至りつつある」という意味になる。

My father is dying.

付加情報 状態を表す動詞は、原則として進行形にならない。

*He is resembling her father.

しかしながら例外があり、例えば、一時的な状態を意図的に進行させようとしている場合には、進行形が可能である。

He is being foolish.

(彼は馬鹿なまねをしている)

比較 He is foolish.

(彼は馬鹿だ)

C 完了形 (have + 過去分詞)

現在完了形の動詞は、過去の一時点から現在までの期間内での、継続、経験、完了・結果を表す。これらの意味を見極めるためには、文中に現れる副詞に注目するとよい。

継 続 : how long、for ten years、since we got married、

経 験 : never、ever、often、many times、

完了・結果 : already、yet、just、

John has been sick in bed for several days since last week.

I have never been to Kyoto.

Everyone has already finished their work.

過去完了形の動詞は、過去のある時点までの、継続、経験、完了を表すとともに、過去のある時点よりも以前に起きた事柄を表す。

Fred gave Anne some lovely flowers that he had bought in the market the day before.

解説

ポイント 状態の継続を表す場合には完了形を、動作の継続を表す場合には完了進行形を用いる。

How long have you lived here?

How long have you been studying English?

注意 完了形の動詞を、特定の時点を示す副詞で修飾することは出来ない。

*When have you arrived here?

When did you arrive here?

*We have arrived here at three o'clock.

We arrived here at three o'clock.

D 受動形 (be動詞 + 過去分詞)

受動文では、能動文の動詞の直後の名詞表現が主語の位置に現れる。

Jane sent a letter to her mother.

A letter was sent to her mother.

Everyone believes Jennifer to be an intelligent woman.

Jennifer is believed to be an intelligent woman.

William took little advantage of us.

Little advantage was taken of us by William.

解説

ポイント 動詞と前置詞などが、一まとまりの意味を表す慣用句と見なせる場合には、前置詞の後に続く名詞表現を主語とする受動文を作ることが可能である。

William took little advantage of us.

We were taken little advantage of by William.

ポイント be動詞の代わりにgetを用い、動作や変化の意味合いを強調することがある。

Strangely, Anthony tried to get arrested.

E 「未来」を表す表現の使い方

未来に起こる事柄を表す場合、いくつかの表現方法がある。

will+動詞の形は、自然な時の流れの結果として起こる出来事を述べたり、話者がこれからする事をその場で決めた場合に用いられる。

It will be snowy tomorrow. (明日は雪になるだろう)
I'll come to the dean's office with you. (それでは私が学部長室へご一緒いたしましょう)

be going to+動詞、be+動詞+ing は、未来の事態の原因が出来つつある場合や、これからやる事をあらかじめ決めていた場合に用いられる。

It is going to rain. (今にも降り出しそうだ)
I'm introducing you to the dean. (私があなた様を学部長に紹介することになっております)

現在形の動詞は、公共的出来事などに代表されるように、予定の確定度が高い場合に用いられる。

The first semester begins on April 6. (第1学期は4月6日に始まります)
We meet the dean at ten o'clock. (学部長には10時にお会いします)

F その他

次のような同一形の動詞の対の意味と述語連結要素の違いのパターンに注意すること。

The sun melted the ice. (太陽が氷を溶かした)
The ice melted. (氷が溶けた)
They read the books. (彼らがその本を読んだ)
The books read easily. (その本は簡単に読める)
John involved me in the case of fraudulence. (ジョンが私をその詐欺事件に巻き込んだ)
The case of fraudulence involved me. (その詐欺事件に私が巻き込まれた)

1 コラム <時制：過去を表さない過去形>

日本語では「お-」「ご-」といった接頭辞や語形変化などの文法的手段によって尊敬や丁寧の気持ちが表現されるが、英語には敬語表現が文法の中に組み込まれてはいない点に注意すべきであろう。そのため現実からの遠さ、心理的距離感、控え目、謙虚さ、丁寧さの表出は英語においては時制という時間的距離感を表す形式に基づいて行われることがある。次例は実際の使用例である(“Did you want some coffee?”(コーヒーはいかがですか?))。相手の現在の気持ちを直接に尋ねるのではなく、動詞を過去時制に変えることで現実からの距離感を表出して丁寧さを表現している。

- (1) Hello. Come on in. I'm Chester Cone. This is my office. Thanks for coming in. Did you want some coffee? Do you? I just made a fresh pot. (LA Weekly)

「距離感」が丁寧さの表出に寄与するというこうした英語の文法特性は、日本語にも相通するところがある。たとえば、「遠慮」、「遠回し」、「婉曲」といった日本語からも推察できるように、丁寧さを表すために表現形式を直接的ではなく間接的に変える発想が日本語にも存在する。

3 動詞を述語とする代表的構文(1)：述語連結要素の現れ方

文がどのように組み立てられているかを理解するためには、文中の述語の意味を見極め、同時に、述語と意味的に密接に連結する要素（述語連結要素）を確認することが大切である。このような手順を踏めば、文の組み立て方を把握することができる。ここでは、述語の典型例である動詞の代表的構文について考えてみることにする。

A say、confess、explain、propose、suggestなど

これらは、発言、告白、説明、提案などを意味する動詞で、confessを例にすれば、(1)告白者 (2)告白先 (3)告白内容が、「告白」の意味に密接に関わり、これらを表す表現が述語連結要素として文の骨組みを作り上げる。具体的には、(1)告白者が主語として、(2)告白先が前置詞表現として、(3)告白内容が名詞表現・節表現として、それぞれ現れる。

Robert confessed the fact to me.

Robert confessed to me that he was not innocent.

告白者：Robert

告白先：to me

告白内容：the fact、that he was not innocent

解 説

ポイント 主語以外の述語連結要素の位置として、一般的に、名詞表現は動詞の直後に、節表現は文末にそれぞれ現れ、以下のような例は許されない。

*Robert confessed to me the fact.

*Robert confessed that he was not innocent to me.

ただし、例外的に名詞表現が文末の位置に現れることがある。これらの例外については「20B 特殊語順構文」を参照。

B ask、convince、encourage、persuade、promise、warnなど

これらは、依頼、説得、勧誘、約束、注意などの意味を表す動詞で、promiseを例にすれば、(1)約束者 (2)約束先 (3)約束内容が関わっていて、(1)約束者が主語として、(2)約束先が名詞表現として、(3)約束内容がto+動詞表現・節表現として現れる。

Barbara promised me to come on time.

Barbara promised me that she would come on time.

約束者：Barbara

約束先：me

約束内容：to come on time、that she would come on time

C give、send、tell、bake、buy、makeなど

これらの動詞は、授与、送付、伝達や、創作、購入などの意味を表す動詞で、sendを例に取れば、(1)送付者 (2)送付物 (3)送付先が、またmakeを例にすれば、(1)創作者 (2)創作物 (3)創作の受益者が、それぞれ関わっている。具体的には、(1)送付者が主語として、(2)送付物が名詞表現として、(3)送付先が前置詞表現として、また(1)創作者が主語として、(2)創作物が名詞表現として、(3)創作の受益者が前置詞表現として、現れる。

Susan sent a letter to her mother.

送付者：Susan

送付物：a letter

送付先：to her mother

Olive made a new dress for her daughter.

創作者：Olive

創作物：a new dress

創作の受益者：for her daughter

解説

注意 buyなどで、前置詞toを用いないことに注意する。

*I bought a gift to my wife.

I bought a gift for my wife.

この構文が表す「購入行為」には、あくまでも「購入者」への「購入物」の移動だけが関わる。購入者以外の人に「購入物」が渡ることを表すためには、次に説明する構文を用いる必要がある。

これらの動詞では、すべての述語連結要素が名詞表現の形で現れることがある。この場合、送付先、創作の受益者などを表す名詞表現が、動詞の直後の位置に現れる。

Susan sent her mother a letter.

送付者：Susan

送付先：her mother

送付物：a letter

Olive made her daughter a new dress.

創作者：Olive

創作の受益者：her daughter

創作物：a new dress

解 説

注意 presentなどの動詞では次のような構文も可能である。

Nancy presented John with their new baby.

付加情報 この構文に対応する受動文・疑問文を形成する場合には、その可否に注意すること。

Her mother was sent a letter.

*A letter was sent her mother.

比較 A letter was sent to her mother.

What did Susan send her mother?

*Who(m) did Susan send a letter?

比較 Who(m) did Susan send a letter to?

付加情報 この構文では、送付先、創作の受益者などが、送付物、創作物などを受け取り所有するという意味が加わる。したがって、「受領所有」の意味にふさわしくない送付先表現を用いることはできない。

William sent a telegram to Germany.

*William sent Germany a telegram.

D place、put、phrase、treat、wordなど

これらの動詞は、配置、設置、位置づけ、言い回し、処遇などの意味を表す動詞で、placeを例にすれば、(1)配置者 (2)配置対象 (3)配置場所が、treatを例にとれば、(1)処遇者 (2)処遇対象 (3)処遇方法が、動詞の意味と結びつく。具体的には、(1)配置者・処遇者が主語として、(2)配置対象・処遇対象が名詞表現として、(3)配置場所・処遇方法が副詞表現・前置詞表現などとして、現れる。

Peter placed these instruments on the shelf.

配置者：Peter

配置対象：these instruments

配置場所：on the shelf

Susan treated me courteously.

処遇者：Susan

処遇対象：me

処遇方法：courteously

E believe、consider、find、suppose、thinkなど

これらは信念、認識、認知、仮定、思考などの意味を表す述語で、considerを例にすれば(1)認識主体 (2)認識内容が、動詞の意味と関係している。(1)認識主体が主語として現れ、(2)認識内容が、節表現、名詞とto+動詞の結合表現、名詞と述語の結合表現として現れる。

Harriet considers that the chair is not comfortable.

Harriet considers the chair not to be comfortable.

Harriet considers the chair not comfortable.

認識主体：Harriet

認識内容：that the chair is not comfortable

the chair not to be comfortable

the chair not comfortable

解 説

注意 2例目と3例目の認識内容を表す部分は、形式的には節には見えないが、1例目とほぼ同じ意味を表すことから、意味的には節をなしていると考えられる。またこれらの節表現は、want、like、make、keep、leaveなどの動詞と共に現れることがある。

I like my coffee to be black.

I like my coffee black.

The boss wants you to be back at work.

The boss wants you back at work.

John keeps our beer cool.

(ビールを冷たくして置いてくれている)

Please leave the door open.

(ドアを開けたままにしてください)

F appear、seem、happen、turn out など

これらの動詞は、ある事柄が、外見的・状況的に推定されたり、偶発的に発生したり、結果的に判明したりすることを表す動詞で、形式的代名詞itが主語位置に、その事柄を表す節表現が動詞のあとの位置にそれぞれ現れる。

It seems that this proposal is controversial.

It happened that there was no one at the office.

この構文には、事柄を表す節表現が分裂して現れる対応構文がある。

This proposal seems to be controversial.

There happened to be no one at the office.

解 説

注意 (un)likelyなどの形容詞表現でも、同様の構文が可能である。

It is unlikely that Jane will come.

Jane is unlikely to come.

ポイント believe等の動詞の場合と同様に、to beが現れない例もある。

This proposal seems controversial.

比較 This proposal seems to be controversial.

It seems that this proposal is controversial.

これら3例の関係は、believe等の受動文を参考にすれば理解しやすい。

This proposal is believed controversial.

This proposal is believed to be controversial.

It is believed that this proposal is controversial.

2 コラム <発話動詞を使い分ける>

中学校では、発話動詞(verb of saying)であるsay、tell、speak、talkを学習する。それぞれの動詞の棲み分けを観察すると面白い。まず、(1)のように「発話(言葉)をそのまま伝える」という点ではsayだけが用いられる。

- (1) John {say/*tell/*speak/*talk} good-bye to his friend.
cf. say {yes, cheese, hello}

次に、(2)のように「発話された内容を伝える」という点ではtellだけが使用される。

- (2) Don't {tell/*say/*speak/*talk} a lie.
cf. tell a {story, joke, secret}

また、sayとtellは「口に出して」言う必要はないという特徴がある。

- (3) a. The writer says in the preface …. (一と述べる)
b. She wrote to tell me she was getting married …. (一と伝える)

さらに、次のようにそれぞれが使い分けられている用例がある(小西友七編、1985、『英語基本動詞辞典』東京：研究社出版。)

- (4) a. He and his wife spoke sometimes, but seldom talked. (H. James, *Pamdora*)
(彼と妻は一方が一方に話すことはあっても、めったにおしゃべりには発展しない)
b. A fool may talk, but a wise man speaks. (*Webster 3rd*) (馬鹿はしゃべるが賢人は話す)

こうした基本的な動詞の違いを理解し、実際に英語を使えるようになりたい。

4 準動詞

準動詞は、動詞の性質を引き継いだ要素で、to+動詞、動詞+ing、過去分詞が含まれる。

A to+動詞

to+動詞表現は、(1)述語、(2)述語連結要素、(3)名詞修飾要素、(4)「目的・結果」を表す副詞的要素、などとして機能する。

Dennis wants his son <u>to travel alone</u> .	his sonと結びつく述語
Dennis wants <u>to travel alone</u> .	願望内容を表す述語連結要素
Dennis has a plan <u>to travel alone</u> .	a plan を修飾する要素
Dennis went there <u>to meet his mother</u> .	目的・結果を表す副詞的要素

解説

注意 to+動詞表現が副詞的要素として用いられる場合、その意味上の主語は主節主語であるのが一般的である。ただし、慣用的な表現の場合は、この限りではない。

To tell the truth, our plan may be unsuccessful.

この場合の意味上の主語はこの文の話者である。

注意 to+動詞表現の主語の役割を果たす表現を示す場合には、for+名詞、または名詞をその直前に置く。

Dennis arranged for his son to travel alone.

Susan sent Henry a book for his son to read.

(スーザンがヘンリーに彼の息子が読む本を送った)

Dennis likes his son to travel alone.

ポイント to+動詞表現は、「未完了・未実行」の意味を表す場合がある。

Please remember to call Nancy up tomorrow morning.

(明日朝に電話するのを忘れないで)

Peter tried to swim across the river.

(泳いで川を渡ろうとした)

Mary is to leave tomorrow.

(メアリーは明日発つことになっている)

Winter is yet to come.

(冬はまだ来ない)

Many problems remain to be solved.

(多くの問題が依然として未解決の状態だ)

比較 I remember calling Nancy up yesterday.

(昨日電話したことを憶えてる)

Peter tried swimming across the river.

(泳いで川を渡ってみた)

B 動詞+ing

動詞+ing表現は、(1)述語、(2)述語連結要素、(3)名詞修飾要素、(4)「時、理由、条件、付随状況」を表す副詞的要素、などとして働く。進行形構文や知覚構文などでは「進行」の意味を表す。

I saw a man <u>walking across the street</u> .	a manと結びつく述語
<u>Eating too much</u> is bad for the health.	is badと結びつく述語連結要素
I met a man <u>resembling my father</u> .	a man を修飾する要素
<u>Arriving at the station</u> ,	時を表す副詞要素
I found that the train had already left.	
<u>Not knowing how to solve the question</u> ,	理由を表す副詞要素
I asked my teacher about it.	
<u>Turning to the left</u> ,	条件を表す副詞要素
you will find the office on your right.	
Do not study <u>watching TV</u> .	付随状況を表す副詞要素

解 説

ポイント 動詞+ing表現の主語の役割を果たす要素を表す場合には、名詞をその直前に置く。

I like my son traveling alone
I remember him dropping in at my office yesterday.

注意 「時、理由、条件、付随状況」を表す副詞的構文（分詞構文）が成立するためには、動詞+ingの意味上の主語と時制が、主節の主語と時制に一致していなければならない。一致しない場合、動詞+ingの前に主語をおいたり、完了形を用いて時制の不一致を示したりする。

The sun having already set, we could not advance any farther.

ただし、慣用的な副詞表現として現れる場合は、この限りではない。

Generally speaking, Japanese people are industrious.

ポイント 動詞+ing表現は、「完了済・実行済」の意味を表す場合がある。

I remember calling Nancy up yesterday.
(昨日電話したことを覚えている)
Peter tried swimming across the river.
(泳いで川を渡ってみた)

比較 Please remember to call Nancy up tomorrow morning.
(明日朝に電話するのを忘れないで)
Peter tried to swim across the river.
(泳いで川を渡ろうとした)

注意 動詞に+ingが付加して、動詞+ing表現ではなく、名詞や形容詞が派生される場合がある。

Today I started <u>understanding</u> what an OS is.	動詞+ing表現
a better mutual <u>understanding</u>	名詞
He was more <u>understanding</u> toward us.	形容詞

ポイント 次の下線部のような表現の修飾のし方の違いに注意すること。

a <u>sleeping baby</u>	(「眠っている」赤ん坊)
a <u>sleeping bag</u>	(「睡眠」のための袋、寝袋)

後者は、flower pot (「花」のための鉢、植木鉢) のように二つの単語が組み合わされた複合語であり、左側の要素に第一アクセントが置かれる。

C 過去分詞

過去分詞表現は、完了形構文以外では、受動の意味を表し、(1)述語、(2)名詞修飾要素、(3)「時、理由、条件、付随状況」を表す副詞的要素 (用法は動詞+ingに準ずる)、などとして機能する。

Timothy can make himself <u>understood</u> in French.	himselfと結びつく述語
I bought a book <u>written in plain English</u> .	a bookを修飾する要素
<u>Written in plain English</u> , the book is easy.	理由を表す副詞的要素

解 説

注意 「have+名詞+過去分詞」の構文は、主語の「意図的な経験」と「非意図的な経験」を表す。主語の経験の快・不快、害・無害は、文脈で決まる。

I had my car repaired.
 I had my bag stolen in the train.
 (*I was stolen my bag in the train.)
 You must have all the work done by the time your boss gets back.

ポイント 出来事を表す自動詞の過去分詞は、助動詞haveを伴わなくても、完了の状態を表す場合がある。

fallen leaves =leaves which have fallen
 The spring is come. = The spring has come.

5 動詞を述語とする代表的構文(2)：to+動詞・動詞+ingを述語連結要素として

to+動詞と動詞+ingのどちらが述語連結要素として選択されるかは、動詞によって異なる。またto+動詞と動詞+ingのどちらが選ばれるかで、文の意味が異なる場合もある。

A intend、prefer、forget、remember、regretなど

これらの動詞は、意志、嗜好や、忘却、記憶、残念の意味を表し、intendを例にすれば、(1)意志主体と (2)意志内容を表す表現が、述語連結要素として必要となる。意志内容は、to+動詞、動詞+ing、節表現などで表される。

Lilly intended to go abroad to study.
going abroad to study.
that it should be done today.

解説

注意 forget、remember、regretでは、to+動詞が「未完了の行為」を、動詞+ingが「完了済の行為」を表す。

Please remember to call Nancy up today.

(今日これから電話するのを忘れないで)

I don't remember calling Nancy up yesterday.

(昨日電話したことを覚えていない)

B begin、continue、start、attempt、tryなど

これらは、開始、継続、努力などを表す動詞で、startを例にすれば、(1)行為開始者と(2)開始される行為を表す表現が述語連結要素として必要となり、開始される行為はto+動詞、動詞+ingなどで表される。

Suddenly Jane started to sing loudly.
singing loudly.

解説

ポイント tryなどでは、to+動詞と動詞+ingで文の意味に違いが生ずる。

Peter tried to swim across the river.

(泳いで川を渡ろうとした)

Peter tried swimming across the river.

(泳いで川を渡ってみた)

注意 人以外の主語が現れる場合がある。

The ice started to melt.

This area will continue to be snowy.

C to+動詞と動詞+ingの一方だけを選択する動詞

agree、decide、refuse、promise、proposeなどは、動詞に後続する述語連結要素として、to+動詞表現を選択し、動詞+ingを許さない。例えばdecideは、(1)決定者と(2)決定内容を表す述語連結要素を必要とし、決定内容はto+動詞によって表される。

John decided to leave here tomorrow.

*John decided leaving here tomorrow.

逆に、avoid、enjoy、finish、mind、stopなどの場合には、動詞+ingが選ばれ、to+動詞表現が述語連結要素としてこれらの動詞に後続することはない。

Many workers stopped smoking.

*Many workers stopped to smoke.

(「喫煙のために」という意味であれば可能)

D hate、like、love、wantなど

好悪を意味する動詞では、好悪の対象となる事柄が、様々な形で現れる。

I hate to talk about myself.

I hate talking about myself.

I like my son to travel alone.

I like my son traveling alone.

I want my coffee black.

I wish I were a bird.

解 説

ポイント likeなどでは、to+動詞と動詞+ingで文の意味に違いが生ずる。

I like to sing a song.

(ある歌を歌ってみたい)

I like singing songs.

(歌を歌っている時が好き)

E toなしの動詞を選択する動詞

make、have、let、see、watch、feel、hear、listen to などの知覚動詞、使役動詞は、toなしの動詞表現や、動詞+ing表現を選択する。

We saw someone go across the hall.

(ホールを横切るのを見かけた)

someone going across the hall.

(ホールを横切っているところを見た)

解説

注意 受動文では、toなしの動詞のかわりに、to+動詞を用いる。

Someone was seen to go across the hall.

付加情報 helpでも、toなしの動詞が用いられることがある。この場合、to+動詞の例に比べて「より直接的な援助」のニュアンスがある。

I helped wash his car.

His comments helped me complete my report.

また、be動詞の直後の位置でも、toなしの動詞が用いられることがある。

What I am going to do is buy a foreign-made car.

The best thing you can do is join us.

F 使役の意味を表す動詞

使役の意味を表す動詞としては、toなし動詞を含む述語連結要素を取るmake、have、letと、to+動詞を含む述語連結要素を取るgetがある。

相手にある事を行わせる際、相手に「したくない気持ち」が生まれる場合がある。この場合さらに、(1)相手の気持ちを無視して強制的に行わせる場合と、(2)努力を傾け得心させて行わせる場合がある。前者の場合にはmakeを、後者の場合には、getを用いる。

I made my husband stop smoking.

(いやがっていた気持ちなど無視して)

I got my husband to stop smoking.

(いやがっていたが、説得して)

また、(3)相手が「望んでいること」または「当たり前に行われること」を、なんら干渉せずに許容し行わせる場合、letが用いられる。

I let my husband continue to smoke.

(喫煙を続けたいそうで、そうさせた)

Let it snow.

(雪が降るなら、降れ)

最後に、(4)相手との常識的な上下関係を背景として、意図的に相手に何かを行わせる場合、また(5)意図せずにある出来事が身に降りかかって来る場合、haveが用いられる。

My father had me help him with the work in the garden. (意図的：使役)
I had a stranger steal my purse in the train. (非意図的：主語の経験)

主語の経験を表す場合、その経験の快・不快、害・無害は、文脈で決まる。

6 名詞

名詞表現は、人、物、事柄などを指し示し、節内で述語連結要素として機能するとともに、述語としても働く。

A 可算名詞と不可算名詞

名詞は、数えられる名詞（可算名詞）と数えられない名詞（不可算名詞）に分けられる。この区別は、日本語の場合と必ずしも一致しないので、数量を表す表現とともに用いる場合には、単数複数に注意する。

可算名詞を修飾する数量表現 : a, an, one, two, three, ..., several, many,
a number of, few, a few, ...

不可算名詞を修飾する数量表現 : much, a great deal of, little, a little,
a piece of, pieces of, ...

どちらも修飾する数量表現 : some, any, enough, a lot of, lots of,
plenty of, ...

解 説

注意 a few/a little「少しはある」とfew/little「ほとんどない」の使い分けに注意する（ただし、fewer, lessは単なる相対的比較なので「より少ない」の意味となる）。

Few students are absent from school.

There was a little water left.

注意 someは肯定文、肯定的返答を期待する疑問文で用い、anyは通常の疑問文、条件文、さらに否定文（「全くない」の意味）で用いる。

I have some questions.
Could you lend me some money?
Do you have any questions?

ポイント 「ある、なんらかの」の意味のsomeは、単数形可算名詞とともに用いられ、また「どのような～でも」のanyは、肯定文で単数形・複数形の名詞を伴って用いられる。

Answer it in some way or another.
Any plan will do.
Buy any books you want.

B 可算名詞への転用

物質を表す名詞は、抽象概念あるいは不定形物質として用いられる場合には、不可算名詞として、「具体的物体」として存在する場合には、可算名詞として扱われる。

paper	紙という物質
a paper	論文、新聞、文書
stone	石という物質、石という材料
stones	物体としての石

同様に、抽象的意味を表す不可算名詞であっても、その抽象的意味が薄れて、「具体化された物」や「具体的な例」を示す表現として、可算名詞の扱いを受けることがある。

demonstration	実証すること
a basic demonstration of finding (of...)	～を基本的な形で実証した例 (～を) 発見すること
findings	発見の具体的事例、発見物
beauty	美
beauties	美しさの具体的な例、美しさの現れ、美人

C 集合名詞

cattle、committee、family、policeなどの集合体を表す名詞は、その集合体に含まれる複数の成員を指し示す場合と、その集合体を一つの単位と見なす場合がある。後者の場合は、普通の可算名詞として扱われる。

The editorial board were extremely pleased with the response to the 'Call for Papers' announcement.

「編集委員会の委員たちは、論文募集告知に対する反応にとっても満足していた」

Most newspapers have editorial boards.

「たいていの新聞には、編集委員会がある」

People talk about you behind your back.

「人は陰で悪口をいうものだ」

These two peoples were often at war against each other.

「これらの二つの民族はお互いとしばしば戦闘状態にあった」

D 定冠詞と不定冠詞

文が発せられた時の状況や、一般的常識として、名詞表現が指し示すものが聞き手にとって特定のものであったり、唯一のものであると判断される場合、theが付けられる。それ以外の場合、単数可算名詞であればa(n)を用いる。また最上級表現や序数表現(twentiethなど)の前にはtheを付ける。

Please show me the way to the post office.

We are going to the station.

the earth, the sun, the sky, the moon, the best answer,

the nineteenth century

E 名詞表現内に封じ込められた述語・述語連結要素

名詞表現内に、述語と述語連結要素が封じ込められることがある。

the barbarians' destruction of Rome

Rome's destruction by the barbarians

比較 The barbarians destroyed Rome.

Rome was destroyed by the barbarians.

F その他

可算名詞は、通常「冠詞なし単数形」で現れることはないが、特定の表現ではこれが許される。

day and night, from door to door, side by side

対句

by taxi, on foot, by bicycle,

交通手段

go to college, go to bed, go to hospital

特別の役割を果たす施設、場所

be elected director, appoint someone admiral

役職

名詞表現は、be、as、likeなどの要素の直後の位置で、述語として働く。

This is a beautiful variation of the original melody.
People regard him as a symbol of peace.
He looks like an old professor.

期間を表す加算名詞が、無冠詞複数形で現れた場合、その数の多さを表すことがある。

for years	何年もの間
centuries ago	何世紀も前に

3 コラム <数えられる名詞/数えられない名詞の区別>

「ことばは心の鏡」と言われるように、文法は言語母語話者の認知基盤に拠るものであることを学習の根底におく必要がある。中学生は(1)のような会話でI don't like octopus. (タコが嫌いです) と習う。

- (1) A: Do you like *sushi*?
B: Yes, I do.
A: Do you eat octopus?
B: No. I don't like octopus. I love salmon.

I don't like octopus.と習った後で、(2)のような会話でI like apples. (リンゴが好きです) という表現を学習する。

- (2) A: Which fruit do you like, apples or oranges?
B: I like apples.

なぜ、I don't like octopus.のoctopusは数えられない名詞扱いを受けるのに、I like apples.のappleは数えられる名詞扱いを受けるのかといった疑問を学習者が抱くのは自然であろう。英語では、数えられない/数えられるものの識別には「どんな名詞も具体的な境界が不明瞭 (unbounded) であると認知されれば、数えられなくなる」という単純な原理が働いているのである。寿司ネタとしてのoctopusは、もはや生物のタコとしての個別性が認知されなくなる。

7 代名詞

先行する名詞表現の重複を避けるために、名詞の代用形、すなわち代名詞が用いられる。英語の代名詞には様々な種類があり、個々の基本的用法を把握しておくことが必要であるが、ここでは特に注意を要する点についてのみ述べる。

A itの注意すべき用法

時間・天候・距離を表す。

It began to rain.
How far is it to the post office?

後続する、節、疑問文、to+動詞、動詞+ingなどを指し示す仮の代名詞として機能する。

It is not clear who will come.
It is hard to learn English.
I believe it hard to learn English.
It is no good asking for their help.

強調構文を導く。

It is John who is knocking at the door.

解説

ポイント who以下が修略される場合がある。

Someone is knocking at the door.
Who is it (who is knocking at the door)?
It is John.

B 反復をさけるone/onesとthat/those

one/onesは、既出の可算名詞表現の一部の代わりに用いられるのに対し、that/thoseは、既出名詞表現のthe+名詞の代用形として働く。

I don't like this jacket. Show me a better one. (one=jacket)
The voice was that of my son. (that=the voice)

解説

ポイント oneは、「どれでも良いからひとつ」の意味を表す場合には単独で現れ、不特定の物を指す。

I don't have a personal computer. I must buy one.

比較 Is this your dictionary? Can I use it?
[it=あなたの辞書そのもの]

oneは単数形として、また、thoseは複数形として、一般的な人を指す場合がある。

One should be careful driving a car.

I don't like those who say such things.

解 説

ポイント oneを不可算名詞を指す代名詞として用いることはできない。

*I like red wine better than white one.

C one、another、some、the other、the others、others

ひとつの集合体から、任意に構成要素を選び出して行く場合、最後に残された要素が単数であれば、その要素は特定可能であるのでthe otherを用いて指し示す。最後に残された要素が複数で、もし特定できればthe othersが、もし特定できなければothersが用いられる。最初の段階で選び出す要素が複数であれば、someを用いる。

{A,B} A : one 最初の成員 B : the other 最後の唯一の成員

{A,B,C} A : one 最初の成員 B : another 次の成員
 C : the other 最後の唯一の成員

{A,B,C,D,E} A : one 最初の成員 B : another 次の成員
 C,D,E : the others 特定可能な残された複数の成員

{A,B, ...} A : one 最初の成員 B : another 次の成員
 ... : others 特定不可能な残された複数の成員

{A,B, ...} A, ... : some 最初の複数の成員
 ... : others 特定不可能な残された複数の成員

Some people like red wine. 赤ワインが好きな人がある。
Others like white. 白ワインが好きな人もある。

D none、no one

noneは、人も物も指し示し、可算名詞を指す場合には複数形として、不可算名詞を示す場合には単数形として扱われるのが一般的である。no oneは、人を指し示し、単数扱いを受ける。

None of us were willing to walk any farther.
None of the wine was left for me.
No one was there.

E each, every, either, neither, both, all

これらの表現は、複数の人・物の存在を前提にするが、each、every、either、neitherは単数扱いを受け、bothとallは複数扱いを受ける。ただし、allが名詞を修飾せず物を指し示す場合には、単数形扱いとなる。

Each person has their own personality.
Each has their own office.
All the people were satisfied.
All were satisfied.
All is well with her.
All you have to do is sleep well.

解説

ポイント either (どちらか一方) の訳し方には注意が必要である。

Take either of the two.	どちらか一方を選べ
Either of the two will do.	どちらか一方を選んでも、それで大丈夫 =>どちらでも大丈夫
I don't know either of the two. = I know neither of the two.	どちらか一方を選んでも、知らない =>どちらも知らない

4 コラム <「数の一致」の実際>

中学校や高校では文法を数学の公式のように規則の集まりとしてとらえてこなかっただろうか。たとえば、数の一致といった文法事項がある。しかしながら、次のような例にも目を向けながら、数の一致は伝達内容によって柔軟に対応することを認識したい。

- (1) Ten miles is a long way to hike.
(10マイルは徒歩旅行には道程が長い。)
- (2) My family are all coming for dinner.
(私の家族全員が夕食を食べに行きます。)
(Larsen-Freeman, D. 2003. *Teaching Language: From Grammar to Gramming*. (Teaching Methods Series). Boston: Heinle & Heinle.)

形式のみに注目すれば、(1)はten milesという複数主語名詞が単数動詞を従えている例、(2)はmy familyという単数主語名詞が複数動詞を従えている例である。こうした用例は文法規則の「例外」、「違反」ではない。実際にはそれぞれの意味が形式に影響を与える文法現象が広く観察される。

- (3) a. Ten miles is a lot better than 50 miles, but not nearly as close as what the council wants: three to five miles. (The Dallas Morning News, Saturday, January 29, 2005)
- b. The District Attorney is right there with us, the police are there with us. (Independent Weekly, November 26, 2003)

こうした一見すると数の不一致に見える言語現象に対しても、「まとまりが認知される集合」ならば単数としてとらえられ、「まとまりではなく成員個々が認知される集合」ならば複数としてとらえられるという一般性の高い原則が働いているのである。

8 形容詞

形容詞表現は、名詞を修飾する要素として、また状態を表す述語として機能する。

A 名詞修飾用法（限定用法とも言う）

形容詞表現が名詞を修飾する場合、名詞の前の位置に現れる場合と、名詞の後の位置に現れる場合がある。名詞の後の位置に現れるのは、名詞がsomeone、nothing、anybodyのような形の場合、形容詞表現が後続する要素を含む場合などであり、それ以外では、形容詞表現は名詞の前の位置に現れる。

someone available、nothing useful
 proposals interesting to me、results important in some respects
 interesting proposals、important results

解 説

注意 a(n)のついた名詞と、so、such、how、whatなどで強調された形容詞をつなぐ場合には、特別な語順になる。

so difficult a problem、 such a difficult problem
 how difficult a problem what a difficult problem

付加情報 形容詞表現が単独で名詞の後に現れ、「特定の場所または時間」の意味合いを含意することがある。

stars visible (特定の時間に見える星)
 the best answer possible (その時に可能な最善の解答)

B 述語用法（叙述用法とも言う）

形容詞表現は、be、as、seem、look、sound、tasteなどの要素の直後で、述語として働く。

It was easy to give in.
That sounds ridiculous.
It seems dangerous to swim here.

解 説

付加情報 形容詞はまた、文末の位置で、文中の名詞表現の状態や結果を描写する述語として働くことがある。

David danced nude.
The Japanese eat fish raw.
They are going to paint the wall yellow.

C 心理状態を表す形容詞

人の心理状態を表す形容詞の中には、動詞+ingと動詞+edの両方の形が存在しているものがある。派生元の動詞は、「心理状態を誘引するもの」が主語位置に現れ、「心理作用を受ける人」が動詞の後に現れる。これに対応して、動詞+ingの形をとる形容詞では「心理状態を誘引するもの」が主語になり、逆に、動詞+ed形の形容詞では、「心理作用を受ける人」が主語になる。

The news was very surprising to him.
He was very surprised at the news.

比較 The news surprised him very much.

解 説

注意 心理状態を表す形容詞のうち、動詞+ed形の形容詞は、特定の前置詞表現を従えることがあるので注意が必要である。

amazed at、disappointed at、embarrassed at、interested inなど

また、byが用いられた場合には、受動的意味が濃くなる。

I was very much surprised by the news. 受動文
比較 I was very surprised at the news. 形容詞文

D その他

述語用法と修飾用法で意味が異なる形容詞がある。また、一方の用法しかもたない形容詞もある。

present (その場において「述語用法」、現在の「修飾用法」)、
late (遅れて「述語用法」、亡くなった「修飾用法」)、
certain (確かで「述語用法」、或る「修飾用法」)
述語用法のみ：liable、subject、content、afraid、asleep、awareなど
修飾用法のみ：elderなど

alleged、potentialなどの訳し方に注意する。

the alleged burglar (押し込み強盗と言い張られた人)
potential applicants (志願者になりそうな人たち)

形容詞と同形の名詞が、専門的用語などとして用いられることがある。

additive 添加物
diagonal 対角線
fixative 固定液
variable 変数

9 形容詞を述語とする代表的構文

形容詞を述語とする構文を考える場合も、動詞の場合と同じく、形容詞と意味的に密接に結びつく述語連結要素に着目することが大切である。ただし、形容詞が述語として働く場合、その直後に述語連結要素の名詞表現が生ずることはほとんど無いので、前置詞表現、to+動詞、節表現などに注意すれば良い。

A difficult、hard、impossible、amusing、pleasantなど

これらは難易・快不快などを表す述語で、難易感・快不快感を経験する者が「for+名詞表現」で表される。

The question is tough for me.
To get along with my parents would be tough for my husband.

解説

ポイント 2例目は、次の構文に書き替えることが可能である。

My parents would be tough for my husband to get along with.

付加情報 この構文は話者の主観的な判断を表す。したがって、客観的な判断を表す形容詞possibleを単独で用いることはできない。これに対して、impossible、barely possibleなどの表現は、主観的判断を表すので、可能となる。

*Barbara is possible to please.
Barbara is impossible to please.
Barbara is barely possible to please.

B clever, crazy nice, polite, stupid, wiseなど

これらは行為と行為実行者双方に対する主観的判断を表す述語で、行為実行者は「of+名詞表現」で表される。

That was wise of Peter.
It was wise of Peter to call the doctor.

解説

ポイント 2例目は、次の構文に書き替えることが可能である。

Peter was wise to call the doctor.

C furious, sorry, amazed, delighted, embarrassed, interested, pleased, shocked, worriedなど

これらの形容詞は人の心理状態を表す述語で、後続する位置には述語連結要素として心理状態を引き起こす誘因を表す表現が現れる。これらは、前置詞表現、to+動詞表現、節表現などで表される。

Olive became happy at the news.
to hear the news.
that we dropped in at her house.
Olive was surprised at the news.
to hear the news.
that we dropped in at her house.

解 説

ポイント 語尾が-edの形容詞には、語尾が+ingの対応する形容詞があり、述語連結要素が逆の語順で現れる。

The news was surprising to Olive.

To hear the news would be surprising to Olive.

That we dropped in at Olive's house was surprising to her.

また、これに対応する動詞構文も存在する。

The news surprised Olive.

To hear the news would surprise Olive.

That we dropped in at Olive's house surprised her.

D eager, hesitant, reluctant, solicitous, willingなど

これらは人の意志・希望の高低を表す形容詞で、述語連結要素として意志・希望の内容（求める事柄）を表す表現が必要となる。これらは、前置詞表現、to+動詞表現、節表現などで表される。

He is eager for success in business.

to succeed in business.

for us to succeed in business.

that we should succeed in business.

E aware, confident, conscious, doubtfulなど

これらの形容詞は人の意識・確信の度合いを表し、意識・確信の内容は、of+名詞表現、節表現などによって表される。

I am certain of his success.

that he will succeed.

(私は彼の成功を確信している)

解 説

注意 この構文に現れるcertain等の形容詞は、下記の二構文にも現れるので、混同しないようにする。

It is certain that he will win.

(きっと彼は勝つ)

He is certain to win.

(きっと彼は勝つ)

次に説明するように、これらの構文は、事柄の蓋然性・可能性の度合いを表す構文である。

F certain、likely、unlikelyなど

これらは、事柄の蓋然性・可能性の度合いを表し、事柄を表す表現が主語の位置に現れる。また、形式的代名詞itが主語位置に、事柄を表す節表現が形容詞のあとの位置にそれぞれ現れることもある。

Anthony's promotion is unlikely.

It is unlikely that Anthony will be promoted.

解説

ポイント 2例目は、次の構文に書き替えることが可能である。

Anthony is unlikely to be promoted.

10 前置詞

前置詞は、名詞や動詞+ingを従えて、全体で「時間・場所・状態」などの意味を表す。

A 前置詞の基本的用法

前置詞表現は、(1)述語、(2)述語連結表現、(3)名詞修飾要素、(4)副詞的要素、などとして現れる。

Your opinion is of great importance. 述語 (=greatly important)

This road leads to Nagoya. 到達点を表す述語連結要素

A man with white hair appeared. 名詞修飾要素

They arrived there after midnight. 副詞的要素

解説

注意 fromのあとには、別の前置詞表現が現れることがある。

from behind the curtain、from under the table

ポイント 前置詞表現で表される「時間・場所・状態」を絞り込むために前置詞の前に「差異、程度」を表す名詞や副詞を置くことができる。

right in the center of Tokyo	東京のど真ん中に
right after the exam	試験の直後に
well after midnight	真夜中をゆうに過ぎて
well beyond our control	ほとんど我々の手に負えない
five minutes before the lecture	講義の5分前に
ten meters above the sea	海面上10メートルのところに

同じ用法は、比較級表現や方角表現でも用いられる。

five pages earlier	5 ページ前に
two inches taller	2 インチ背が高い
one kilometer north of the station	駅の北1キロのところに

注意 back、down、up、outなどと同じように、in、on、over、throughなどが、名詞を従えずに副詞として機能する場合がある。

take after a person	前置詞
take a question up	副詞
take moisture in	副詞

5 コラム <前置詞から英語話者の発想を学ぶ>

日本語と英語との間に見られる形式と意味の対応のズレが引き起こすエラーのひとつに前置詞の選択という問題がある。みなさんは(1)と(2a-c)の「で」に対応する英語表現を確実に使い分けられることができるであろうか。

- (1) 彼女はポケットナイフでカキの殻を開けた。
- (2) a. 彼はバイオリンでドラムのパートを演奏しようとした。
b. その曲はラジオでかかった。
c. 彼は電話で叫んだ。

(1)の「で」と(2a-c)の「で」はその意味的差異により英語では異なる表現によって表現される。(1)の「で」はナイフが「道具」であることを合図し、“She opened the oyster shell with a pocket knife.”のようにwithに対応する。(2a-c)の「で」はバイオリンやラジオや電話が「場所」であることを合図し、下記の用例が示すようにonに対応する。

- (3) a. The quartet's violinist, Jacqui Carrasco, who also teaches music at Winston-Salem's Wake Forest University, says she learned to dance tango before she learned how to play it on the violin. (*Independent Weekly*, August 13, 2003)
b. And [when] we looked out the windows at all these people while the music was playing on the radio, you can just see my mother's insides were like, "I'm gonna lose them to this because we're here." (*Independent Weekly*, July 5, 2000)
c. You will be able to sell these mushrooms.' And he was so relieved that he actually cried on the phone." (*Independent Weekly*, July 28, 2004)

このように日本語の助詞「で」がwithやonなどのさまざまな前置詞に対応するため、日本人英語学習者は不自然な英語表現を使うことが多い。しかし、実際には、with+〈道具〉とon+〈場所〉は使い分けられている。つまり、道具扱いを受けるナイフなどの事物は手にもたれて動かされることで、ある行為や状態の成立にかかわる。ところが、場所扱いを受ける事物はそれ自体が決して動かされることはない。文法はもはや規則の機械的な暗記ではない。英語母語話者の発想や事象に対する認知の仕方を理解しながら、文法の基礎を固めてゆくことが大切である。

B 注意すべき前置詞の用法

after	～にちなんで		Robert was named after his grandfather.
but	～以外の		all the members but three
against	～に反対で		against your proposal
		比較	for, in favor of ～に賛成で
around	～ごろ		Peter arrived around midnight.
by	～までにすでに		Have it finished by tomorrow morning.
		比較	till, until ～までずっと
			Nancy kept singing till noon.
by	～を交通輸送手段として		by land, by air, by sea, by car, by post
by	～単位で		by the dozen (普通theを伴う)
by	～の差だけ		taller by three inches = three inches taller
during	～の間		during the operation (区切りが明確な期間)
for	～の間		for several years (区切りが明確でない期間)
for	～を求めて		feel for my key in my pocket 手探りでさがす
for	～に向けて		For Ueno Bound for Ueno の略
for	～のかわりに		substitute coal for oil
in	～経過したら		in a week
in	～の状態で、～をなして		in tears, in bad health, in a line
in	～を着用して		in blue, in a hat
of	～のなかでも		Of all the students, John is the most eager.
of	～のある		of importance, of no use (抽象名詞とともに)
on	～にくっついて		a picture on the wall
on	～するとすぐに		on my return to Japan
on	～について		talk on Chinese history
over	～しながら		talk over lunch
over	～に優って		choose a person over other applicants
through	～の終わりまで		from 2001 through 2004
to	～なことには		to my regret
to	～の		a side to this box secretary to the president
under	～の最中で		under construction
with	～の状況で (付随状況)		with the door open (ドアが開いていて) with tears in his eyes (目に涙を浮かべて) with night falling (夜のとばりが降りる中) with his eyes closed (両目が閉じられて)

解 説

ポイント 最後の付帯状況を表す構文では、withの後に必ず名詞とその述語が現れるので、これを主語とその述語として考える事が大切である。

the door open	ドアがあいている
tears in his eyes	涙が両目にある
night falling	夜のとばりが降りつつある
his eyes closed	彼の両目が閉じられている

注意 時などを表すために、this、last、nextなどを用いたり、これらの意味を含む名詞を用いる場合には、前置詞が不要になることがある。

this year、last year、next year、today、yesterday、tomorrow

11 副詞

副詞表現には、形容詞や副詞を修飾する他、動詞表現や節を修飾する様々な用法がある。

A 様態修飾の副詞

動詞が表す事柄の様態・有様を修飾する副詞は、動詞の前や文末に現れる。

live happily、arrive late、drive slowly、easily read the book

B 文修飾の副詞

文によって表される事柄全体を修飾する副詞は、文頭、助動詞の直前、助動詞の直後に現れる。

Evidently、Edmond got angry.

The train unfortunately will be late.

This story is possibly true.

解説

ポイント これらの例は、次のような例に置き換えて考えると理解しやすい。

It is evident that Edmond got angry.
 It is unfortunate that the train will be late.
 It is possible that this story is true.

ただし、次の二つの例は同じ意味にはならない。

Apparently, Edmond got angry. (どうやら)
 It is apparent that Edmond got angry. (明らかだ)

比較 It appears that Edmond got angry. (どうやら)

C back、down、up、outなど

「場所、時間、方向」を表すback、down、up、outなどの副詞は、動詞の後や、前置詞の前などに現れて、漠然とした場所、時間、方向を表す。

look back 回想する
back in the eighties 過去の80年代に
 look up 見上げる
up in the clouds 上空の雲の中に

解説

注意 動詞の後に名詞が現れる場合、代名詞と普通の名詞で、許される語順が異なることに注意する。

pick him up *pick up him
 pick John up pick up John

D 副詞的な前置詞表現・従属節表現

前置詞表現や従属節表現が、副詞表現と同じように、動詞や節を修飾することも当然可能であり、この場合、文頭、助動詞の前後、文末の位置、などに現れる。

No one should drive a car recklessly.
 No one should drive a car in a reckless manner.
 John actually did not tell the truth.
 John in fact did not tell the truth.
However, Susan accepted the offer.
Although her husband didn't like it, Susan accepted the offer.

12 接続詞

接続詞には、等位接続詞と従位接続詞があり、全く異なった働きをする。等位接続詞は、同じ資格の要素を並列的に並べる働きをもつ。従位接続詞は、節を導いて、文の述語連結要素や、名詞修飾の節や、副詞的機能を持つ節を作り上げる。

A 等位接続詞：and、or、but、for

and、orが3つ以上の要素を並列する場合には、「A, B(,) and C」の形を取る。この決まりは、かなり厳密である。

men or women

in China and in Japan

Be careful and be brave.

I cooked, and my sons ate.

I wonder where John is and whether he is alive.

Have you ever been to Tokyo, Kyoto, Osaka, or Kobe?

We are not interested in the form, the color, etc. (etc. = and so on)

解 説

ポイント 等位接続詞orや、not only～but also～、neither～nor～、not～but～によって並べられた要素と動詞の一致に関しては、動詞に近い要素の数・人称に合わせる。

Either you or I am responsible for the problem.

Not only she but also they are going to visit you tomorrow.

ただし、as well asによって並べられた要素の場合は、前の要素に一致させる。

注意 for は、文と文の間に入り、文を並列する

I went to bed early, for I was tired.

*For I was tired, I went to bed early.

比較 Because I was tired, I went to bed early.

注意 命令、勧誘、注意などを表す文の後で、and、orは、それぞれ「そうすれば」「さもないと」の意味になる。

You had better hurry, and you will be in time.

You had better be in a hurry, or you will miss the bus.

B 従位接続詞：that、whether、if（～かどうか）

述語連結要素や、名詞の内容を説明する同格節を作る。

William explained that the earth is round.

That he made a mistake is true.

Answer the question whether the material is liquid or solid.

解説

注意 thatは動詞の直後の位置などで省略が可能である。また、ifは動詞の直後の位置などで許される。

William explained the earth is round.

I don't know if the material is liquid or solid.

接続詞のthatと関係詞のthatの違いに注意すること。

the idea that God created man

接続詞

the idea (that(=which)) they accepted

関係詞

C 従位接続詞：when、after、before、till、until、while、as、since、as soon as、the momentなど

時を表す副詞節を作る。この副詞節は、主に、文頭、文末に現れる。

When we arrived at the station, the train had already left there.

It began to rain the moment we reached the peak.

D 従位接続詞：because、since、as、now that、in thatなど

理由・原因を表す副詞節を作る。この副詞節は、主に、文頭、文末に現れる。

Now that he is married, he comes home earlier.

Peter likes Susan because she is always kind to him.

解 説

付加情報 because節が、話者が主節文を発話するに至った理由を表すことがある。

His story must be true, because he never tells a lie.
(なぜそう言えるかという、彼は決して嘘をつかないからだ)

E 従位接続詞 : **if、unless、provided (that)、providing (that)、in case (～ の場合は)**
など

条件を表す副詞節を作る。この副詞節は、主に、文頭、文末に現れる。

In case an accident occurs, report it to me immediately.

F 従位接続詞 : **though、although、even if、even though、whether (=regardless of whether)**
など

譲歩 (～だが) を表す副詞節を作る。この副詞節は、主に、文頭、文末に現れる。

Although he talked a lot about me, nothing of it was true.

解 説

注意 thoughには、副詞の用法 (しかしながら) があるので、接続詞用法と混同しないようにする。

Though he talked a lot about me, nothing of it was true.
(従位接続詞用法)

He talked a lot about me. Nothing of it was true, though.
(副詞用法)

G 従位接続詞 : **so that、in order that**など

目的を表す副詞節を作る。この副詞節は、主に、文末に現れる。

Turn off the light so (that) you can sleep well.

H 従位接続詞：so that、such...that、so...thatなど

結果を表す副詞節を作る。この副詞節は、主に、文末に現れる。

It was so hot that I could not walk any farther.

I 従位接続詞：as、as if、as thoughなど

様態（～のように）を表す副詞節を作る。この副詞節は、主に、文末に現れる。

Do as you like.

J 従位接続詞の注意点

従位接続詞に導かれる節は、前置詞表現と同じように、述語連結要素、名詞修飾要素、副詞的要素として機能するので、単独の文として現れることはない。

Peter likes Susan because she is always kind to him.

Peter likes Susan. *Because she is always kind to him.

また、従位接続詞によって作られる副詞節では、主語とその直後のbe動詞が省略されることがある。

While (we were) in Tokyo, we visited many museums.

That is not probable, though (it is) possible.

解 説

ポイント 上の例のような省略が許されるのは、主節と副詞節の主語および時制が一致する場合に限られる。

6 コラム <接続詞に気をつけよう>

becauseやbutを習ったばかりの日本語話者は、次のような不自然な英語を書いてしまうことがある。

- (1) a. I was absent from school. Because I caught a bad cold.
b. My mother went, but, I did not.

(1a)は「私は学校を休みました。なぜなら、ひどい風邪を引いたからです。」に対応する英語を書くのに、接続詞becauseの誤用を含んでいる。(1a)はI was absent from school, because I caught a bad cold.のように修正されなければならない。日本語では「なぜなら」から始まる文を先行文から独立させることができるが、英語では、次のようにwhy疑問文の答え以外は、because節は独立文として用いられないことを学習者は理解する必要がある。

- (2) A: Why can't I go?
B: Because you are not old enough.

また、(1b)は「私の母は出かけました。しかし、私は出かけませんでした。」に対応する英語である。日本語の「しかし」が読点を伴うことが多いことから、butの後にカンマを入れてしまう日本人学習者が少なくない。しかしながら、howeverとは異なり、butの後にはカンマを介在させないのが自然な英語である。このような日本語の接続詞の用法との違いに基づく誤りは、入門期の英語学習者には避けられない面があるが、誤ったまま学習を続けてゆくと知識が化石化する危険性があるので注意したい。

13 疑問文

疑問文には、主節として直接的に質問をするための直接疑問文と、主節内に従属節として組み入れられる間接疑問文がある。

A 直接疑問文

直接疑問文の文頭の位置には、助動詞や疑問詞などが「疑問文の標識」として現れる。

Have you ever been to Kyoto?
Aren't you hungry?(=Are you not hungry?)
What do you mean by that?
Who do you think loves you?
By whom were you kicked on the leg?

B 間接疑問文

間接疑問文は、述語連結要素として機能し、その文頭の位置に疑問詞や疑問の接続詞が「疑問文の標識」として現れる。

Whether he can swim across the river is not clear.
I wonder if you are hungry.
I know who likes to travel alone.
We must decide whether to postpone the event or not.

解 説

ポイント 第4例と同じように、主語を持たないto+動詞表現の前に、疑問詞（whyを除く）が現れることがある。

how to solve the problem
whom to visit next
what to send as a gift

注意 疑問詞が、名詞、形容詞、副詞を修飾する場合、疑問詞と修飾される要素が文頭に現れる。

How eager to leave were you?
How eager were you to leave?
*How were you eager to leave?
What books are you going to read?
*What are you going to read books?

C 注意すべき疑問文

Let's try cleaning up the room, shall we?	勧誘の付加疑問文
Open the window, will you?	命令の付加疑問文
Why don't you ...?	～しましょうよ

14 助動詞

助動詞は、主語と動詞の間に現れて、主語の「意志、能力、義務、裁量」などを表したり、文で表されている事柄全体の蓋然性・可能性を述べたりする。

A 助動詞の二つの意味

助動詞には二通りの意味があり、どちらの用法であるかを見極めることが大切である。

I will go abroad to learn English.	意志	つもりだ
He will be in time if he hurries.	可能性	だろう

I can swim on my back.	能力	できる
Everyone can sometimes be selfish.	可能性	ありえる
I must go home.	義務	必要がある
You must be John Smith.	可能性	ちがいない
You may use a cellphone now.	裁量	してもよい
He may be honest.	可能性	かもしれない

B 助動詞+完了形

「～してしまっているだろう」「したことになる」などの、未来の時点までの完了、経験などを表す場合、will、shallなどの助動詞と完了形を組み合わせて用いる。

They will have finished the work by the end of this week. (終わってしまっているだろう)

「～したかもしれない」「～したに違いない」などの、過去の事柄の実現可能性を表す場合、may、can、must、ought to、shouldなどの助動詞と完了形を組み合わせる。

Everyone must have arrived at the station by now. (到着したはずだ)
Can the story have been true? (ほんとうだった可能性があるのか?)

「～すべきであった」というような、過去の行為の義務性に言及し、実現されなかった事柄に対して批判・反省の気持ち表す場合、ought to、shouldなどの助動詞と完了形を組み合わせた構文を使う。

You should have read the paper more carefully. (より注意深く読むべきだった)

7 コラム <英語話者と日本語話者の文化的価値意識の違い>

相手のためになるものや利益になることをすすめたい気持ちをことばで表現するとき、英語と日本語とでは表現の仕方に違いがあるだろうか。

- (1) a. You must eat this cake. / Try it. / Have a nice day. / Drink Coke.
b. お口に合わないかもしれませんが / つまらないものですが / もしよろしければ …

英語では相手の利益になるものをすすめるときにはyou must、命令形などの直接的な表現が多用される点に注意されたい。つまり、「英語では相手の利益になると話し手が判断する場合には、できるだけ直接的に表現する」という会話の原則が働いているからである。一方、日本語では当該のものが相手に好ましいかどうかは相手が判断することととらえる気持ちがことばに表れている(西光義弘編. 1999. 『日英語対照による英語学概論』東京: くろしお出版.)。

解説

ポイント 助動詞と完了形の役割を次のように考えるとわかりやすい。

should	have arrived
可能性 (はずだ)	過去 (到着した)
should	have read
義務 (べき)	過去 (読む~だった)

付加情報 「話者の主観に基づく義務」と「周りの事情から生ずる義務」を区別する場合、前者にはmustを、後者にはhave toを用いる。

You must go there.	(話者としては、行ってもらわないと困る)
You have to go there.	(情勢からして、行く必要があるよね)

C shouldの注意すべき用法

命令、決定、提案、要求などの内容を表す従属節の中では、shouldが現れたり、あるいは動詞が原形で現れる。仮定法（仮定法現在）を参照。

We suggested that William should accept the offer.
It is necessary that the plan be reconsidered in great detail.

解説

ポイント shouldは、話者の驚き、意外性などの気持ちを表す場合にも用いられる。

Why should you say such a thing?
It is strange that John should do that.

D 助動詞の注意すべき用法

Jennifer might well get angry	いたしかたない
You may as well go out to eat.	してもよい
Olive would often listen to the radio at midnight.	したものだ
Dennis would not let me in.	しようとしなかった
The door will not open.	しようしない

解 説

注意 might、could、wouldなど助動詞を用いて、依頼表現を丁寧にすることがある。

Would you please lend me your book?

Could I talk to you for a while?

E 助動詞の役割を果たすbe動詞と完了のhave

be動詞と完了のhaveは、助動詞がない場合、助動詞と同じように、主語と倒置したり、否定要素notを後続させたりする。

Can you swim across the river?

You cannot swim across the river.

Is flying planes dangerous?

Flying planes isn't dangerous.

Have you finished your lunch?

You haven't finished your lunch, have you?

F その他

助動詞に類推させて、次の動詞・形容詞を述語とする表現を、文で表される事柄の信憑性、可能性、伝聞、結果的明白性などを表す表現とみなすこともできる。

Anna is believed to be honest and sincere.

is likely to

is unlikely to

is said to

is sure to

proved to

turned out to

15 仮定法

仮定法は、事実に反する状況を仮定しその帰結を推測する場合に用いられる用法であり、日常的にもよく使われる。構文の型に注意する必要がある。

A 現在の事実に反する仮定法

if + 主語 + 過去形 (be動詞はwere), 主語 + would, could, should, might + 動詞
 「(現在は～ではないが,) もし～であったら、～だろう」という意味を表す。

If you were a bird, you could fly freely up in the sky.
 (もし鳥であったら、自由に空高く飛ぶことができるだろう)

B 過去の事実に反する仮定法

if + 主語 + 過去完了形, 主語 + would, could, should, might + 完了形
 「(あの時は～でなかったが,) もし～であったとしたら、～だったろう」という意味を表す。

If it had been rainy, we could not have arrived here in time.
 (もしもあの時雨が降っていたら、時間内に到着出来なかったであろう)

解 説

ポイント 二つの仮定法が融合し、「(あの時は～でなかったが,) もし～であったとしたら、現在は～であろう。」という意味を表す例もある。

If he had followed my advice, he would be still alive.
 (もしあの時私の忠告に従っていたら、彼はまだ生きているだろう)

C 仮定法を含む他の構文

If...were to 動詞

If it were not for, If it had not been for

Were it not for, Had it not been for

Without ...

An American would never say such a thing.

I wish I were a bird.

You look as if you had had a nightmare.

It is time you cooked dinner.

万が一～すれば

～が無かったなら

～が無かったなら

～が無かったなら

アメリカ人であったなら……

鳥だったならばなあ

悪夢を見たかのような……

(今はいつもの状況でないですが、)

いつもだったなら料理する時間です。

D 仮定法現在

要求、推薦、提案、必要性などを表す述語が接続詞that付きの節を取る場合、この節内の主動詞は、(1)動詞原形と同一の形（仮定法現在）になるか、(2)助動詞のshouldを伴う（イギリス英語）。

I suggested that our plan (should) be carried into execution at once.

It is necessary that Olive (should) pursue her studies here.

16 否定文

否定文では、否定要素の位置と、否定の影響の及ぶ範囲に注意しなければならない。

A not、never、hardly、scarcely、barely

これらの否定要素は、一般的に、助動詞、完了のhave、be動詞の後に現れる。また、notが一般動詞とともに現れる場合には、助動詞doの後に現れる。

Anthony could hardly sleep a wink last night.

I have never been to Kyoto.

Roberta did not buy her husband any gift.

解 説

注意 否定の影響が、文全体に及ばず、後方の特定の要素に限られる場合がある。

I don't need all the tools to repair the bicycle.

(自転車修理に道具は必要だが、その全部がいるわけではない)

Susan doesn't like Henry because he is handsome.

(ヘンリーは好きでその理由もあるが、ハンサムだからというわけではない)

ポイント 上の例で、理由を表す節の前にカンマを置き、イントネーションの切れ目を置けば、否定の影響が理由を表す節に及ばなくなる。

Susan doesn't like Henry, because he is handsome.

(彼はハンサムだから、好きじゃない)

B 文頭位置の否定表現

否定表現が文頭位置に現れると、助動詞が主語の前の位置に生ずる。

Never have I seen such a beautiful scene.

Nor will I fail to keep my promise.

C not、so

not、soが、先行する文の内容を指し示すことがある。

Is he married? I think so. (=I think he is married.)

I think not. (=I think he is not married.)

17 関係詞

関係詞は、who、whom、whose、which、where、when、why、thatなどで、関係詞に導かれる節は、名詞を修飾し限定したり（限定用法）、名詞を説明しその情報を追加したりする（非限定用法）。これらの節は、間接疑問文に類似した語順をとる。

A 限定用法

限定用法の関係詞節は、形容詞などと同様に、名詞を修飾し名詞が表す内容を限定する。

Lilly has two daughters who became teachers.

The person to whom you wanted to talk was my brother.

I don't know the place where you lived for seven years.

解 説

ポイント who、whom、whichは、直前に限定修飾される名詞があり、なおかつ直後に主語がある場合には、削除可能である。

the person <u>to whom</u> you sent a love letter	削除不可
the person <u>who</u> sent a love letter to you	削除不可
the person <u>(who)</u> I thought sent a love letter to you	削除可

注意 場所などを表す名詞の場合、which、in which、whereと、後続する節の形の対応関係に注意すること。

the place (which) we lived in
the place in which we lived
the place where we lived

付加情報 関係詞は、to+動詞表現と共に現れることがある。

This is an easy violin on which to play sonatas.
This is a pleasant room in which to work.

B 非限定用法

非限定的用法は、同格表現などと同じように、名詞が表す内容の付加的な説明を行う。関係詞の前にカンマが置かれ、イントネーションの切れ目が入る。that、why、howには非限定用法はない。

Lilly had two daughters, who became teachers.
Dr. White, who dropped in while I was out, left a message.
My son was born in the year 2000, when my father passed away.

解 説

ポイント whichが非限定的に用いられ、先行する文の全部または一部を指すことがある。

I often fell asleep in class, which made Mr. White angry.
Olive looks like an able lawyer, which she really is.

C whyとhow

名詞reasonの後では、whyが省略された形や、接続詞thatが用いられた形が好まれる。

the reason why William was fired
 the reason William was fired
 the reason that William was fired

また、名詞wayの後では、howが用いられる形は用いられず、howが省略された形や、接続詞thatが用いられた形、またはin whichが用いられた形が好まれる。

*the way how he did it
 the way he did it
 the way that he did it
 the way in which he did it

D thatの注意すべき用法

all、every、any、noなどが付く名詞や、「唯一」の意味を持つ名詞を修飾する場合、関係詞としてはthatが好まれる。

This is the very place that I lived in when I was four years old.

また、thatは、前置詞を伴って用いられることはない。

*This is the very place in that I lived when I was four years old.

解 説

注意 関係詞のthatと接続詞のthatの違いに注意すること。

the idea (that(=which)) they accepted	関係詞
the idea that God created man	接続詞

E 修飾する名詞を含む関係詞

whoever、whomever、whichever、what、whateverや、whenever、whereverは、修飾する人・物、時・場所を組み込んだ関係詞であり、節を従え述語連結要素として働く。

What I really want to buy is a foreign-made car.
 My boss hates to meet whomever I ask him to meet.
 I'll go wherever my boss may order me to move.

解 説

注意 この用法のwhatと疑問詞用法のwhatを混同しないこと。

I want to use what you bought.

(あなたが買ったもの)

I want to know what you bought.

(あなたが何を買ったか)

また、whoever、whomever、whichever、whatever、whenever、whereverに加えて、howeverとwhetherは、節を従えて、譲歩（……だとしても）を表す副詞節としても働く。

Whatever you choose, you will be satisfied with the result.

However hard I work, I will not be totally exhausted.

解 説

注意 これらの譲歩節は、no matter what、no matter howなどを用いて表すこともできる。

No matter what you choose, you will be satisfied with it.

No matter how hard I work, I will not be totally exhausted.

8 コラム <数・量の英語表現は大丈夫か>

英語を学習する日本語母語話者に共通して観察されるエラーにはどのようなものがあるだろうか。英作文指導に長年携わってきた金子（1991）は「私たち日本人は数・量についての英語表現がとても苦手である」と指摘する（金子稔. 1991. 『現代英語・語法ノート』東京：教育出版）。たしかに、(1b)や(2b)のような不自然な表現を使用する学習者が少なからず見受けられる。

- (1) a. 3千人の学生 (three thousand students)
b. { *three thousands students / *three thousands of students }
- (2) a. 1時間半 (one and a half hours / one hour and a half)
b. { *one and a half hour / *one hour and half }

今や、英語を書く力は話す力と同様にその必要性が高まっている。英語独自の発想や認知の仕方を理解しながら、コツコツと文法の基礎を固めてゆくことが大切である。

18 比較

日本語の自由な比較表現に比べて、英語の比較表現には一定の文法上の縛りが課されるので、注意すべき点が多い。しかしながら逆に言えば、英語の比較表現には一定の型があり、複雑な例も容易に理解することができる。

A 基本的な比較

比較表現として、as ... as、not as ... as、-er(more)...thanなどを用いる場合、比較される対象の文法上の資格・形に注意しなければならない。

The climate of Niigata City is not as severe as that of Nagaoka City.

*The climate of Niigata City is not as severe as Nagaoka City.

【厳しさの比較 新潟市の気候：長岡市の気候】

John's salary is higher than Bill's.

*John's salary is higher than Bill.

【高さの比較 ジョンの給料：ビルの給料】

She likes him better than I do.

【彼に傾ける好意の比較 彼女が：私が】

She likes him better than me.

【彼女が傾ける好意の比較 彼に：私に】

I find more pleasure in mathematics than in English.

【私を感じる楽しさの比較 数学に：英語に】

I am cleverer than I was.

【賢さの比較 現在の私：過去の私】

B 倍数表現

倍数を表す場合には、as、-er、moreや、数量などを表す名詞表現の前に、twice、three times、half、two thirdsなどの表現を置く。

half as large as...

three times longer than...

twice what they were ten years ago

解 説

ポイント as、than以下は、省略されることがある。

You are happy, but I am twice as happy (as you).
Be more serious about it (than you are).

C theの有無

-est、mostの前には通例theが現れる。

Mary is the best dancer of the three.
He is the strongest of all.

「たいていの、非常に」の意味のmostはtheを伴わない。

Most people were satisfied with the show.
That's most kind of you.

D the+比較級, the+比較級

-er、moreによって修飾される要素全体が文頭に現れることに注意する。

The harder you work, the more pleasure you find in it.
The louder Susan sings, the less attractive her singing becomes.

E 比較表現を修飾する要素

all the、none the	-er、moreの前で「それだけ、なおさら」
much、(by) far、even、still、yet	-er、moreの前で「ずっと、さらに」
much、(by) far	-est、mostの前で「ずば抜けて、断然」

解 説

ポイント -er、moreの前に、差異を表す具体的な表現が現れることもある。

five pages earlier	5ページ前に
two inches taller	2インチ背が高い

F 注意すべき比較表現

The living room is no larger than the bedroom.
 =The living room is not any larger than the bedroom.
 寝室と居間を比べて広さに差は全く (any) なく、広くない。
 「寝室も広くないし、居間も同じ位に広くない」

no more than 10 pages	10を全く超えず、多くない	「10ページだけ」
no less than 10 pages	10を全く下回らず、少なくない	「10ページも」
ten or more pages	10ページ以上	
ten pages or more	10ページかそれ以上	
not more than 10 pages	10を超えない	「多くとも10ページ」
not less than 10 pages	10を下回らない	「少なくとも10ページ」
as many as 200 people	200人もの人たち	
more than one	単数名詞の前に現れて	「1を越える、複数の」
more or less	多かれ少なかれ、程度の差はあれ、だいたい、おおよそ	

解 説

注意 次のような比較表現では、-er、moreを用いない事に注意すること。

inferior to、superior to、prior to、junior to、senior to、
 preferable to、prefer ... to....、
 rather than....、different from(than) など

19 省略

先行する表現の重複を避けるために、後続する表現を省略することがある。省略は、限られた条件のもとでのみ可能であり、この条件を把握しておくことが重要である。

A 名詞表現の省略

所有を表す'sに後続する名詞表現は、省略の対象となる。

This book is William's ~~book~~.
 => This book is William's

Bill's attitude toward students is marvelous,
but George's ~~attitude toward students~~ is not so.
=> Bill's attitude toward students is marvelous,
but George's is not so.

B 動詞表現の一括省略

助動詞、動詞を従えるto、完了のhave、be動詞に後続する動詞表現は、一括省略の対象になる。

Can you swim across the river? Yes, I can ~~swim across the river~~.
=> Can you swim across the river? Yes, I can.

You may follow me, if you want to ~~follow me~~.
=> You may follow me, if you want to.

He has to do everything he can ~~do~~.
=> He has to do everything he can.

解 説

注意 省略要素の直前の助動詞などには必ず強勢（アクセント）が置かれ、これらを短縮形にすることは許されない。

Yes, I AM. / *Yes, I'm.

C その他

並列的に配置された文などにおいて、重複を避けるために後続の動詞が単独で省略される場合がある。

Mary had pizza, and I had pasta. => Mary had pizza, and I pasta.

but notを含む表現では、述語連結要素や動詞なども省略されている可能性があるため、何が省略されているかを明確にすることが必要である。

They are poor, but they are not mean-spirited.
=> They are poor, but not mean-spirited.

She is playing the piano now, but she is not playing very well.
=> She is playing the piano now, but not very well.

You can criticize me, but you cannot criticize my parents.
=> You can criticize me, but not my parents.

注意 この構文では、主語の名詞表現であってもbut notの後に現れる。

Clams are available here, but oysters are not available here.

=> Clams are available here, but not oysters.

9 コラム <「時制の一致」の実際>

時制の一致のような文法規則は入門期の学習者には有効であるが、現実の文法を反映してはいない。実際に収集した資料を観察すると、S+said+that補文内の動詞が(1)のように時制の一致を受けない場合もあれば、(2)のように受ける場合もあることが確認できる。

- (1) a. He said he is confident he would win a referendum.

(*The Guardian*, Saturday November 30, 2002)

- b. He said that he is concerned that judges are not thought to be rubber-stamping the executive, that judges are acting in a judicial capacity.

(*The Guardian*, Wednesday March 9, 2005)

- (2) a. He said his name was Charles. He was eventually picked up by a taxi and dropped off at Liverpool Lime Street station 25 minutes later.

(*The Guardian*, Saturday August 16, 2003)

- b. He said his name was Hajdari. The man in the wheelchair was called Hajdari too.

(*The Observer*, Sunday October 31, 1999)

こうした時制の一致、不一致について、最近の興味深い研究がある。Declerck (1991)は、(3a)は話し手がビルのお話を真に受けている、(3b)は話し手がビルのお話が本当かどうかに関して自分の見解を差し控えているといった含みがあると指摘している。

- (3) a. Bill told me that he has a house in New York.

- b. Bill told me that he had a house in New York.

(Declerck, R. 1991. *A Comprehensive Descriptive Grammar of English*. Tokyo: Kaitakusha.)

このような点にも関心を払いながら英語学習を進めてゆくと、英語の姿がはっきりと見えてくるだろう。

20 情報構造と特殊語順構文

情報伝達の観点から文の組み立て方を考えると、特定要素に強勢（ストレス）を置かない場合、重要度の高い新しい情報が文末位置に現れる傾向が強いと言える。

A 情報構造

古い情報（旧情報）と新しい情報（新情報）がどのように文に組み入れられるか（文の情報構造）を考えるために、下記の二つのパッセージを比べてみる。

When we watch kittens and puppies playing, we realize that through play they are learning how to live. They learn various physical skills, such as how to jump over barriers without getting hurt. (平成16年度センター試験から)

We realize that kittens and puppies are learning how to live through play, when we watch them playing. They learn various physical skills, such as how to jump over barriers without getting hurt.

二つのパッセージは基本的に同じ内容であるが、最初のパッセージに見られるような円滑な情報の流れが、2番目のパッセージには感じ取れない。最初のパッセージでは、「子猫・子犬の遊び」という話題が提供され、次に「遊びを通して生きるすべを学ぶ」という観察結果が示され、その後で「生きるすべ」の例として「怪我せずに障害物を飛び越える方法などの身体的技術」が挙げられている。

話 題 kittens and puppies playing

旧情報 play

新情報 are learning how to live

具体例 various physical skills,
such as how to jump over barriers without getting hurt

2番目のパッセージでは、「子猫・子犬が生きるすべを遊びを通して学ぶ」ことが突然伝えられ、次にその観察は「この動物たちが遊んでいるのをみる場合」のものであることが示され、その後で「怪我せずに障害物を飛び越える方法などの身体的技術」が挙げられている。

話 題 kittens and puppies are learning how to live through play

旧情報 them playing

具体例 various physical skills,
such as how to jump over barriers without getting hurt

ここで違和感が感じられるのは、(1)話題の情報量が多すぎる、(2)旧情報が文末に現れている、(3)「how to live」とその具体例「various physical skills...」が離れていることなどによると考えられる。

解 説

ポイント 文法規則に従いながら、文の前部に旧情報を、後部に新情報を配置し、円滑な情報の流れを作り上げることが必要である。また、逆に、このような情報構造の仕組みを手がかりにして、文を理解することも必要である。

B 特殊語順構文

動詞と結びつく述語連結要素のうち、主語以外の名詞表現は、通常動詞の直後の位置に現れるが、次の例のように、文末に現れることがある。これは、この名詞表現が重要な新情報を表す場合である。

Mary threw a gift into the wastebasket.

Mary threw into the wastebasket a gift that she'd received from Sam.

(メアリーがくず箱に投げ入れたのは、サムから受け取った贈り物である)

また、次の例のように、主語が文末に現れる場合、その主語は新情報として扱われることになり、「予想・予測が困難な情報」と見なされる場合が多い。

A man stood in the doorway.

In the doorway stood the sheriff.

(出入り口に立っていたのは、なんと保安官であった)

同様に、名詞表現を修飾する要素が、その名詞表現から離れて、文末の位置を占める場合、その要素は新情報として扱われる。

I lent it to a student of physics yesterday.

I lent it to a student yesterday who seemed very interested in physics.

(それを昨日学生に貸したんだけど、その学生は物理学にとっても興味があるみたいだった)

A review of the book appeared.

A review appeared of Pinker's book.

(書評が出たが、それはピンカーの本の書評だ)

解 説

付加情報 最後の例のように、主語名詞表現を修飾する要素が文末位置を占める場合、その文の述語は、ほとんど、出来事を表す動詞や、受動動詞である。

主語位置に意味を持たないthereが現れ、be動詞などが用いられる構文（存在構文）では、動詞の直後の名詞表現が意味的に主語として機能する。この主語位置に現れる要素は、初出の新情報を表すので、定冠詞を伴ったり、固有名詞であったりすることは原則的には許されない。

There is something wrong with you.
 There are many people unhappy.

(あなたには良くないところがある)
 (幸せでない人がたくさんいる)

解 説

付加情報 ただし、該当項目を列挙する場合には、様々な名詞表現が現れる。

Is anyone left behind?
 There's Joan and there's also Dennis.

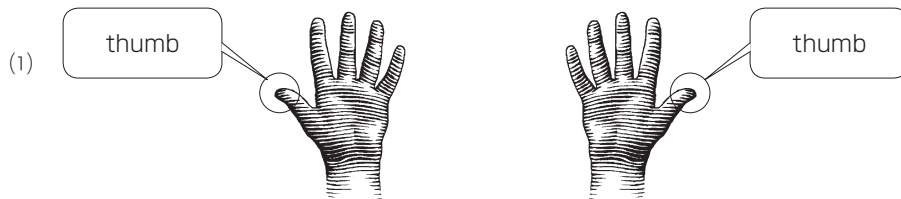
解 説

ポイント 通常の語順の決まりに従わない特殊な語順をとる構文には、何らかの点で特殊な情報構造の仕組みが働いている。

10 コラム <英語と日本語の語順は鏡に映る関係>

英語と日本語の語順は鏡像関係(mirror image relation)にある。

両手を見てみよう。「手」であることに変わりはないのに、左右が対称であることに気がつく。英語と日本語の語順もこれとよく似た関係である。



(1) 住所を英語で初めて書いたとき、表記の仕方の違いを不思議に思わなかっただろうか。

鏡 面

8050, Ikarashi, Nishi-ku, Niigata-shi, Niigata, 950-2181 ① ② ③ ④ ⑤ ⑥		950-2181 新潟県 新潟市 西区 五十嵐 8050番地 ⑥ ⑤ ④ ③ ② ①
--	--	--

(2) 中学校で習ってきた英語を振り返って見てみよう。

<p>a friend in the U.S. a friend who lives in the U.S. Did you finish your homework? How do you like your new house? Don't answer me back. Answer my question. Dogs don't bark at parked cars.</p>		<p>アメリカの ともだち アメリカに住んでいる ともだち 宿題は 終わりました か? 新しいお家は どうです か? 口ごたえする な。 質問に 答え なさい。 犬は 駐車中の車には 吠え ない。</p>
---	--	---

英語と日本語のことばの並び方はたしかに違う。しかし、英語も日本語も同じ「人間のことば」である。それぞれの語順がまったくでたらめに違っているわけではないことに気づくだろう。

21 復習(1): 「基本文法」で取り上げた代表的な構文

「基本文法」で取り上げた代表的な構文を列挙しておくので、一度目を通して確認しておくこと。

I like to sing a song.

Dennis likes his son to travel alone.

Olive likes traveling alone.

Olive likes her son traveling alone.

I like my coffee black.

Dennis wants to travel alone.

The boss wants you to be back at work.

The boss wants you back at work.

Dennis arranged for her daughter to travel alone.

Animals inhabit the forest.

Animals live in the forest.

We treated her courteously.

Peter placed these instruments on the shelf.

Robert confessed the fact to me.

Robert confessed to me that he was not innocent.

Barbara promised me to come on time.

Barbara promised me that she would come on time.

Susan sent a letter to her mother.

Olive made a new dress for her daughter.

Susan sent her mother a letter.

Olive made her daughter a new dress.

Nancy presented John with their new baby.

Harriet considers that the chair is not comfortable.
Harriet considers the chair not to be comfortable.
Harriet considers the chair not comfortable.

Please remember to call Nancy up today.
I don't remember calling Nancy up yesterday.
I remember him dropping in at my office yesterday.

It seems that this proposal is controversial.
It happened that there was no one at the office.

Lilly intended to go abroad to study.
Lilly intended going abroad to study.
Lilly intended that it should be done today.

Suddenly Jane started to sing loudly.
Suddenly Jane started singing loudly.

Peter tried to swim across the river.
Peter tried swimming across the river.

John decided to leave here tomorrow.
Many workers stopped smoking.

I helped wash his car.
His comments helped me complete my report.

John keeps our beer cool.
Please leave the door open.

I made my husband stop smoking.
I got my husband to stop smoking.

My husband let me continue to smoke.
Let it snow.

My father had me help him with the work in the garden.
I had a stranger steal my purse in the train.

The question is tough for me.
To get along with my parents would be tough for my husband.

That was wise of Peter.

It was wise of Peter to call the doctor.

Peter was wise to call the doctor.

Olive was surprised at the news.

Olive was surprised to hear the news.

Olive was surprised that we dropped in at her house.

The news was surprising to Olive.

To hear the news would be surprising to Olive.

That we dropped in at Olive's house was surprising to her.

The news surprised Olive.

To hear the news would surprise Olive.

That we dropped in at Olive's house surprised her.

He is eager for success in business.

He is eager to succeed in business.

He is eager for us to succeed in business.

He is eager that we should succeed in business.

I am certain of his success.

I am certain that he will succeed.

Anthony's promotion is unlikely.

It is unlikely that Anthony will be promoted.

22 復習(2)：名詞句を修飾する要素

述語連結要素のうち、下に示すような、前置詞、to+動詞、動詞+ingなどを含むものは、その形の特徴に着目することによって、比較的容易に識別できる。

in the forest

to sing a song

his son to travel alone

for his son to travel alone

traveling alone

her son traveling alone

また、節を構成する述語連結要素も、接続詞や疑問詞に注意すれば、識別しやすい。

that the chair is not comfortable
whether the material is liquid or solid
who likes to travel alone

これに対し、名詞を中心にして組み立てられる名詞句の範囲は、常に特定しやすいわけではない。基本的な事柄であるが、名詞の前後に現れる修飾表現のいくつか列挙しておく。

代名詞	<u>these</u> people
数量詞	<u>all</u> people
冠詞	<u>the</u> people
形容詞	<u>important</u> people
動詞+ing	<u>working</u> people
過去分詞	<u>civilized</u> people
形容詞表現	claims <u>different from ours</u>
前置詞表現	claims <u>by right of descent</u>
動詞+ing表現	claims <u>depending on reliable evidence</u>
過去分詞表現	claims <u>brought forward</u>
to+動詞表現	claims <u>to be 20 years old</u>
同格のthat節	claims <u>that he did it for the money</u>
関係代名詞節	claims <u>that contradicts the evidence</u>

これらは極めて基本的な文法項目であるが、おろそかにしてはいけない。例えば、次の例を考えてみよう。

Every student questioned about his or her shortcomings answered honestly.

この例は、高校卒業レベルの学習者でもよく間違える例である。主動詞の候補が二つあるが、等位接続詞がないので両方が主動詞になることはなく、いずれかが過去分詞であることになる。ここで、上記のclaims brought forwardの用法を知っていれば、questioned about his or her shortcomingsとanswered honestlyのいずれかが、直前の名詞のを修飾していると考えることが可能になる。意味を考えても、後者が主動詞となることは容易に理解できるはずである。しかしながら、等位接続詞や過去分詞の基本的用法を中途半端に覚えていたのでは、このような例でさえまともに理解することができなくなってしまう。何事でも当てはまるが、基本が大切なのである。